
『肉』

おふ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『肉』

【Nコード】

N8379M

【作者名】

おぷ。

【あらすじ】

お題『人魚』で書きました。

クリームシチューにじゃがいもは欠かせないと思う。

今日は特別だから、市販のルウではなく小麦粉からホワイトソースを作ることにした。生クリームよりも牛乳の方が柔らかく仕上がる気がする。

ソースを煮詰める間に、丁寧に切り揃えた野菜たちを炒める。味を馴染ませる為にバターを落とし、玉葱、人参、じゃがいもの順番に投下していく。

充分に火が回った場合で鍋に移して、空いたフライパンに塩とタイムで下味を付けた「切り身」を慎重に乗せ、表面を焼き固めるようにさっと炙っておく。

このタイミングで、パン生地を並べておいたオーブンに火を入れる。その一呼吸の時間差でコンソメスープと「切り身」を投入し、ローリエを被せたら蓋を閉める。弱火で20分、ブロッコリーを足してまた少し煮込んだら、丁度パンが焼き上がる。

ああ。いよいよだ。

カウンター越しにリビングの時計を確認した。もうすぐ夫が帰宅する。部屋着に着替えてもらっている間に、食卓の準備は整うだろう。

私は弾む胸を宥めるように、食器を洗い始めた。

噂を初めて聞いたのはもう一昔も前のことだ。

この海沿いの街に越してきて、漸く人にも風土にも馴染んだかな、という時分だった。

正直、益体もない話だと笑うしかなかった。荒唐無稽な、凡そ時勢にそぐわぬ飛語だ。誰もがそう考えたのだろう、暫くすると耳にすることもなくなり、すっかり忘れ去られていった。

その廃れた筈の噂が再燃したのは、数ヶ月前、相馬のお屋敷に長

女が出戻ってからだった。

良家の子女のくせに妙に気さくな性質だったその長女とは、友人の少なかった転入当時、歳が近かったこともあり親しくしていた。彼女が遠方に嫁ぐことになったときは夜通し飲み明かし、離れて後も時折連絡を取り合う仲だった。しかしそれも次第に間遠になり、いつしか途絶えてしまっていた。

それだから、彼女が独り身に戻った理由を知ったのは、その噂と共に人伝てだった。

忸怩たる寂寥感を覚えたと同時に、到底信じられない経緯に、それを糾すべく彼女を訪ねたのだ。

「お久しぶり」

十数年振りの彼女を一目見て、けれど用事はそれで済んでしまった。

「本当だったの」

声にならない呟きに、彼女は微かに笑った。

「あの人は耐えられなかったみたい」

そうして、知りたいか、と訊いた。

あの頃と、本当に何一つ変わっていない彼女から視線を外せないまま、魅入られたように、頷いた。

オーブンが音を立て、我に返った。開け放しだった蛇口を捻り、鍋の火を止めて時計に目をやる。

夫の帰りは遅れているようだ。

外したエプロンをスツールに掛けてから、ソファに移動した。連絡は入っていない。急な残業ということでもなさそうだ。道が混んでいるのだろうか。

こんな日に、という思いに、やや焦れる。

私は堪え切れず、鍋の様子を見に戻る。まだ温かい。食欲を刺激する匂いが立ち昇った。

時間が欲しいのだ、と彼女に伝えた。

「治療が長引いているの」

このままでは、効を奏する頃には別の要因が邪魔をするかもしれない。そう不安を吐露した。

「じゃあ、二人分なのね」

二人分は難しいかもしれない、と彼女は続けた。

それでは意味がないと食い下がると、僅かな沈黙の後、半年待つよう言われた。

「それでも、それが最初で最後よ」

「どういうこと」

「授かる子供の分までは用意できないということ」

その言葉の意味を咀嚼しようとして試みたが、実感は湧いてこなかった。

構わないと応え、彼女もそれ以上は何も言わなかった。

待ち望んだその「切り身」が届いたのが、今日だ。

夫はまだ帰ってこない。

先に食べてしまおうか。

その誘惑は抗い難く、逡巡した後、一口だけ味見をした。ごくごく当たり前の食感だった。これならきつと夫の不審も買っまい。

懸案事項が解決したことに満足して、蓋を閉じた。

時計を振り仰ぐ。それにしても遅い。

「生ではなく火を通すなら、調理をしてから少なくとも一日以内に食べてね」

彼女の注意を思い出す。それ以降は、効果がなくなるのだということだった。

猶予は充分にある。

逸る気持ちを抑えて、再びソファに体を沈める。我ながら落ち着きがない。

テレビは臨時ニュースを流していた。玉突き事故だ。近いな、とぼんやり考える。

夫はまだ、帰ってこない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8379m/>

『肉』

2010年10月21日20時31分発行